

北山節郎編

太平洋戦争放送宣伝資料

全4巻

開戦初期の電波戦の**秘資料**。
政府・軍の宣伝戦の全容と各界知識人の
戦争プロパガンダ協力の実相を示す。

緑蔭書房

刊行の辞

小社では今年、日米情報戦争史料として、北山節郎編『太平洋戦争メディア資料』を刊行した。開戦・終戦時の日本の対外報道の全容を米側の傍受記録によって明らかにしたものであった。反面、戦争資料に関する日本側の原資料の乏しさを示すものでもあった。しかも情報戦のような謀略性、機密性の高いものは、その多くが敗戦時に日本軍の手で焼却されたか、米軍によって押収された。今回の資料のように、開戦初期の対外宣伝戦の真相とその協力者名まで示した情報局作成の「部外秘」資料が焼却をまぬがれ、しかもまとまった形で残っているのは希有なことであろう。研究者にとっては貴重な歴史的資料である。

政府の情報宣伝政策は満州事変以降強化され、一九四〇年、第二次近衛内閣時に情報局が成立した。放送はその一元的支配を受けることになった。太平洋戦争開始とともに放送も完全な戦時体制に入り、番組もすべて国家目的の遂行が最優先となった。対外宣伝放送Ⅱ電波作戦は戦争プロパガンダの中心的役割を担った。とくに戦時指導者層をはじめ各界の代表的な人物による「講演放送」は、政府・軍部の意思を対内外に伝える重要なものであった。その影響力の大きさは外国のメディアが放送内容を日本の公式意見として取り上げていることからわかる。本資料は太平洋戦争に関する日本の基本的見解、各界知識人の戦争認識、欧米・アジア認識、さらにそれら知識人の戦争協力の実相を知る歴史的な資料である。

広く活用されることを期待するものである。

一九九七年七月

緑蔭書房



編者の言葉

第二次世界大戦は、短波放送による宣伝の戦いであった。日本における対外放送宣伝の担い手が日本放送協会である。太平洋戦争勃発直前の一九四一年九月、「海外放送」の放送時間は二十二時間五十五分に拡大されていた。この時、「海外放送」は臨戦体制を確立したといえる。さらに太平洋戦争開始直後の十二月二十日、軍事作戦を反映して、東南アジア方面への放送が拡大された。「海外放送」は政府の情報宣伝政策の下に行われた。対外放送方針の大前提となったのが、十二月八日、情報局が策定した「日英米戦争ニ対スル情報宣伝方策大綱」である。さらに別冊として「対外宣伝ノ部」が作られた。この別冊は「大東亜戦争ニ対スル情報宣伝方策大綱」と題された。この別冊が指示する方策を実行したのが、日本の対外宣伝機関である日本放送協会と同盟通信社の対外報道であった。今回復刻したのは、これまで殆んど見ることができなかった情報局発行の『海外放送講演集』三冊（昭和一七年）と、『対敵電波戦』第一号（昭和一八年）である。『講演集』の刊行趣旨には「本講演集ハ大東亜戦争勃発ト共ニ武力戦ト呼応シ、海外放送ニ於テ我が公正ナル戦争目的ト大東亜建設ノ真義ヲ闡明シ、敵側抗戦意志ヲ破碎スル為ニ敵国国民ニ対シ積極且活発ニ実施中ノ対敵放送ニ於テ、米国向、重慶向、印度向ニ放送セル講演ヲ選ビ対外宣伝放送ノ資料トシテ印刷セルモノナリ」とある。また『講演集』の目次には放送方向、テーマ、それに珍しいことに放送者の個人名が明らかにされている。対敵放送を行った人たちの固有名詞が明記されていることにより、当時の知的エリート、地域情報の専門家たちが「海外放送」の宣伝に動員され、どのような発言を行ったかを今日に至るまで残しているのである。『対敵電波戦』第一号は、「大東亜戦争勃発以来我が海外放送において対敵、対第三国、対枢軸国、及対占領地向けに行ひたる放送実施状況を概説した」ものである。戦争初期は、日本の対アジア宣伝に重点があり、アジアの人々への呼びかけが記録されている。『海外放送講演集』とあわせて、日本による地域別対外放送宣伝の様相を知ることができよう。

昭和十七年九月

海外放送講演集

第三號

情報局

第三課

昭和十七年十二月

海外放送講演集

第四號

情報局

第三課

部外秘

最大の朗報である

櫻本富雄 「詩人」

太平洋戦争の敗戦直後、日本の官庁は占領軍による戦争責任追及をおそれて、戦争関連の諸資料を処分した。このために、たくさんの貴重な公文的資料が散失した。民間レベルでも、官庁に追従した。

そのような事情から、これまで戦時下の実相を語る基本的な資料は、多くが入手至難であった。たまた古書界に出現しても、びっくりするほど高価である。戦時期の海外放送は電波戦と呼称され、多くの文化人が参戦した。しかし、その実態を証明する資料は、ほとんど保存されていない。

今回刊行される『太平洋戦争放送宣伝資料』は、情報局発行の『海外放送講演集』や『対敵電波戦』の集成である。これは待望の企画である。

『歴史の証言』資料

竹山昭子 「メディア史研究」

この『太平洋戦争放送宣伝資料』は、日本の放送史に書かれることの少ない影の存在である対敵、対第三国、対枢軸国、対占領地向け短波放送の記録である。この対外放送宣伝の実行は日本放送協会であるが、当然ながら政府の強力な情報宣伝政策の下に行われた。そのことは、この『海外放送講演集』『対敵電波戦』のいずれ

第

1
巻

対米放送

偽善は民主主義に非ず「正富笑入」

アメリカ人に寄す「棟尾松浩」

米国の諺見と誤算「郷 敏」

米国外交史の教訓「神川彦松」

米国民に告ぐ「杉森孝次郎」

米国の偽善「松本瀧蔵」

対重慶放送

大東亜戦争の本質と目的「藤沢親雄」

大東亜戦争と重慶「小室 誠」

重慶政権下の中国国民に與ふ「平 貞蔵」

重慶の錯覚「長野 朗」

対印度放送

印度人に想ふ「野口米次郎」

印度民衆諸君に想ふ「伊東 敬」

参考資料

軍需生産計画に関するルー・スヴェルト大統領の議会教書

エドガー・スノウ稿「日本再認識論」

第

2
巻

対米放送

米国民に與ふ「神崎驥一」

戦時米国の意外な同衾者「百々正雄」

米国民の戦ふ可き途「直海善三」

東京日記「東 一」

アメリカの青年に寄す「永戸政治」

対重慶放送

重慶政権下の中国軍官諸君に告ぐ「大岩和嘉雄」

重慶政権の指導者並にその治下にある軍官民諸君に告ぐ

「小牧実繁」

重慶政権下の中国国民に告ぐ「波多野乾一」

全中国の識者に與ふ「山崎清純」

重慶政権地域の諸君へ「山本実彦」

対印度放送

印度の兄弟に「高嶋米峰」

参考資料

戦後世界秩序に関する米國務長官ハル放送演説

も、情報局によって刊行されている事実からもわかる。特に興味深いのは、『海外放送講演集』に採録されている講演に個人名が記されていることである。著名な学者、ジャーナリスト、出版社社長、評論家が続々と登場する。これら知的エリートたちが国家の要請にこたえて「米国民に告ぐ」「重慶政権下の中国国民に與ふ」「印度人に懇ふ」といった講演を行っている。本人にとっては闇に葬りたい記録であろう。

また、『対敵電波戦』の附録に「敵側に於ける我が海外放送の反響」があるのは貴重だ。例えば、ジャパンタイムスアンドアドバタイザー社長・郷敏氏の講演「米国の謬見と誤算」（一九四二年五月二五日）が『講演集・II』にあるが、その放送に対するニューヨークタイムスの社説（五月二七日）が掲げられている。まさに太平洋を挟んだ電波戦、情報戦であった実相がリアルに迫ってくる。

敗戦時に焼却されることなく保存されてきた資料を、『歴史の証言』として復刻することの意義はまことに大きい。北山節郎氏の綿密な解説も余人にはなし得ないものである。

アジア太平洋戦史待望の資料

内海愛子 「恵泉女学園大学教員」

待望の資料集である。

アジア太平洋戦争は、電波による宣伝戦でもあった。

国内に向けての放送、映画、音楽、絵画などによる宣

▼各巻の主な目次より

第3巻

対米放送

開戦責任に関する米英側の主張を衝く「神川彦松」

米国が救はんとする英国の実体とは「百々正雄」

合衆国からの一引揚邦人の断相「坂西しほ」

対米通信「海老名一雄」

対重慶放送

抗戦中国の諸君に語る「直海善三」

重慶と大東亜戦争「石濱知行」

対印度放送

印度各大学教授及学生諸君に対する吾等の叫び「木村日記」

ガンジー翁七十四回誕辰に際して「野口米次郎」

ガンジーに與ふ「大川周明」

対印通信

参考資料

真珠湾惨事責任者陸海将領譴責報告書主文「ロバーツ報告書」

米国第七十八議会に於ける大統領一般教書

米国大統領予算教書内容要旨

第4巻

世界に叫ぶ我が海外放送「昭和十六年十二月」

敵国軍隊に呼びかく「昭和十六年十二月」

ABCDを破碎して進む我が聖戦の電波「昭和十七年一月」

マニラ陥落を繞る放送戦「昭和十七年一月」

対米放送戦の複雑性「三月」

ビルマ戦線と対重慶放送戦「四月」

敵機空襲と我が海外放送の活動「四月」

米国内の微妙な情勢と対米放送「五月」

戦争理由に我が主張を借用する米当局「六月」

米当局宣伝の目標「七月」

米ジャーナリズム末期的症状「七月」

対敵放送に演芸、音楽による新企画「七月」

「和平」を夢みる米戦時情報局長官「九月」

日本の公正なる俘虜取扱「十月」

南太平洋海戦と放送戦「十月」

東亜侵略の米英思想に宣戦「十一月」

敵側に於ける我が海外放送の反響「附録」

伝については、これまでも研究が出ている。だが、日本が海外にむけてどのような宣伝を行ったのか、宣伝の内容を知ることは難しかった。

オーストラリアで、日本の短波放送を受信した記録を見たことがある。かなりの量の電信や受信記録が、英文に翻訳されている。これらの海外放送の内容は、オーストラリアの研究者によって分析され、研究書もでていた。また、キャンベラで、日本とドイツの宣伝戦の比較研究をしている若い研究者にも出会った。

アメリカでは、太平洋の島々にいる米兵に向けた放送「ゼロアワー」の人気DJだった「東京ローズ」の声が、土産用のカセットに納められていた。当時の戦時宣伝のポスター展を、ワシントンで見たこともある。

第二次世界大戦と宣伝は、大きなテーマである。とりわけ放送による宣伝の力は大きいにもかかわらず、必ずしも注目されてこなかった。北山氏の労作『ラジオ・トウキョウ』三部作が、対外宣伝に関する唯一まとまった研究といってもよいだろう。膨大な資料に目を通して北山氏が、ようやく『海外放送講演集』をまとめてくれた。これで、日本の海外むけ宣伝を知ることができる。

アジア太平洋戦争の全貌を、私たちはまだつかみきつてはいない。この大きな空白を埋める貴重な資料集の刊行を心待ちにしている。図書館には必ず置いてほしい価値ある資料集である。

印度人諸君よ、我々日本人は同情と熱意に溢れた隣人としてビルマに居ることを、重大な考慮に入れて行動して下さい。私は今これ以上を語る必要がないと信じます。(六月六日英艦、ヒンヅー語、ウルドゥー語放送)

ガンジーに與ふ

大川 周 明

マハトマ・ガンデーは、その「日本人に対する警告」を、彼のパーソナル・コレクションを以て始めて居る。それ故に予もまた之に對する答辯を、予自身のそれを以て始めるであらう。

今より三十餘年以前、龍樹研究を卒業論文として東京帝大を出た時、予が心密かに期したりしは、一生を印度哲學の研究に獻けることであつた。予は大卒卒業後の數年を、如何なる職業にも就くことなく、日毎大學圖書館に通つてウパニシャッド研究に没頭した。

さて予に取りて決して忘れ難き一書は、コットンの「新印度」である。印度に關する至深の關心が、現在の印度及び印度人に就て知りたいたいといふ念ひを、いつとはなく予の心に萌し初めさせたことは何の不思議もない。一九一三年夏、一夕の散歩に予は古本屋の店頭で曝されたるコットンの書を見出した。予は「新印度」といふ書名に心惹かれ、求め歸つて之を讀んだ。而して筆紙盡し難き感にうたれた。

此時に至るまで予は現在の印度に就て殆ど知る所なかつた。未だ見ぬヒマラヤの雄渾を思慕し、印度思想の莊嚴を景仰しつつ、予は唯だ婆羅門教の道場、佛陀降誕の聖地としてのみ、腦裡に印度を描いて居た。然るにコットンの

(一) 放送延時間及機械使用延時間

放送延時間

三十時間三十分

機械使用延時間

六十四時間十五分

(二) 使用國語

二十ヶ國語
日本語、獨逸語、伊太利語、英語、佛語、スペイン語、ポルトガル語、支那標準語、廣東語、福建語、マレー語、タガログ語、泰語、和蘭語、ビルマ語、ヒンヅー語、ウルドゥ語、タミール語、トルコ語、イラン語、アラビヤ語、露語

二、敵側に於ける我が海外放送の反響

桑港放送ワシントン一月四日發インターニュース

米海軍省當局は敵側宣傳に乗ぜられるなど發表し次のやうに述べた。

「敵側放送はカビテ軍港の戦況を報じてゐるが、敵側放送は全然事實無根である。米國民は敵の宣傳によつて混亂せしめられてはならない。」

開戦・終戦時の日本の対外報道とその米国傍受記録集成！

北山節郎編

太平洋戦争 メディア資料

全 2 巻

I 開戦—真珠湾攻撃と対外報道

II 終戦と対外報道

本書の構成

太平洋戦争メディア資料 I

I 解説

- 一 「ハワイ奇襲第一報」——消された？大本営発表
開戦ニュース／ハワイ攻撃発表／香港攻撃発表／開戦
詔書発布時間／付録～太平洋戦争開戦大本営発表文比較
- 二 米傍受記録に見る12月8日の日本側報道米側傍受記録
／トランスクリプト研究
- 三 「ニシノカゼ ハレ」
ウインド・メッセージの原文は？／フルテキストが
し／天気予報傍受
- 四 極東国際軍事裁判と開戦の放送
放送録音盤と録音記録／ラヂオ報道記録「報道部ニ
ース係」ヨリノ抜粋

五 同盟報道

II 資料——68件収録(次頁参照)

太平洋戦争メディア資料 II

I 解説

- 一 二つのラジオ・トウキョウ
- 二 黙殺
ポツダム宣言傍受／外国紙が伝えた第1回黙殺報道／

鈴木首相の「黙殺」発言／トルーマンが読んだ傍受記
録とは？

三 原爆

FBISが記録した同盟の「第1報」／東亜放送の広
島被爆連続報道／トルーマンの原爆投下声明

四 ソ連参戦

ソ連参戦を海外に速報／ラジオ・トウキョウも速報／
戦勝第一報／大本営発表

五 最初の「聖断」と広島その後

公電発信時間の疑問／米軍の外交電報解読／傍受され
ていた国内放送／原爆抗議

六 待つ日々

米側回答／回答を待つアメリカ

七 8月15日

ポツダム宣言正式受諾／アメリカが記録した玉音放送
／米海軍が翻訳した終戦詔書／大屋久壽雄の知られざ
る大放送

八 敗戦直後の日本とメディアの解体

原爆被害キャンペーンとアメリカの反発／ラジオ・ト
ウキョウ海外放送中止／特派員情報ストップ／同盟解体

II 資料——241件収録(次頁参照)

本書に収録した主要資料

米FCC(連邦通信委員会)傍受記録
「対米英開戦臨戦番組抄」(邦文)
太平洋戦争開戦大本営発表文比較(邦文)

開戦時「海外放送」番組表(邦文)

トランスクリプト1 12月7日北米西部・ハワイ向け英語ニュース
トランスクリプト12 12月8日国内放送(東亜中継)日本語ニュース
ハワイ空襲発表
トランスクリプト14 12月8日第3送信 北米西部・ハワイ向け日
本語ニュース、「ニシノカゼ ハレ」放送を記録
トランスクリプト23 12月9日第2送信 北米西部向け英語放送
「帝国政府声明」

ウインド・メッセージ実行放送に関する日本人への尋問(10月・11月)

日本放送協会録音記録(邦文・英文)
ラヂオ報道記録(邦文・英文)

12月7日ホノルル発同盟電「初空襲開始」(邦文)

「日本側放送の傍受記録インデックス」の分類法

7月27日、鈴木首相「演説」傍受を試みる米国
7月27日午後6時45分、同盟「イグノア」電、ポートルランド傍受
鈴木首相会見、米國務省記録
7月28日午後7時23分、東京国内放送「今週の戦況」、グアム傍受

8月6日午後6時、同盟東亜向けカナ文字送信、広島被爆第一
報と考えられる。
8月6日午後7時、RT東亜放送広島空襲ニュース、ポートル

ンド傍受

8月6日午後9時、大阪中央放送局空襲ニュース、グアム傍受

8月9日正午、同盟北米向け英語送信、モトロフ声明、ハワイ
カウアイ傍受

8月9日午後1時1分、RT北米向け英語放送

8月9日午後3時、同盟東亜向けローマ字送信

「日本の降伏への動き」米太平洋戦略諜報局作成

8月10日、RT欧州向け英語放送「原爆目撃」談、サンフランシ
スコ傍受

連合国回答到着と同盟送信

8月14日午後4時4分、RT北米向け英語放送

8月14日、「ピース・トーク」カード#68、同盟欧州向け英語放
送「宣言受諾の詔書まもなく発布」

8月14日、「ピース・トーク」カード#70、同盟米向け英語送信、
「ポツダム宣言受諾、通報と発表」

8月15日正午、東京国内放送、冒頭と終戦詔書、硫黄島傍受

8月15日、「終戦詔書英語文」
米海軍諜報局による英訳終戦詔書

8月15日午後、RT欧州向けイタリア語放送「詔書原稿」

8月15日午後1時1分、RT東亜放送「大屋編成部長大演説」全
文。ポートルランド傍受

8月15日、ソ連の放送、ポートルランド傍受

9月3日、連合国最高司令官総司令部指令第二号

9月14日、GHQ海外放送再開拒否回答書米陸軍原案

- 体裁
- 定価

B5判・上製クロス装・ケース入り

[本体価格68,000円＋税]

◆北山節郎編

太平洋戦争放送宣伝資料

戦時期の放送は国家の宣伝機関であった。情報局が対敵電波戦を指導し、最初は大東亜戦争目的の正当性と「大東亜建設」の真義を欧米、アジア各地に伝えた。本資料集所収の『海外放送講演集』『対敵電波戦』は対外宣伝戦の中心をなす「講演放送」の全貌を明らかにする貴重な資料。戦時メディア史、日本の大東亜戦争観を示す一次資料。

◆本書の構成

- 第1巻 部外秘 『海外放送講演集』 第二号 昭和17年6月
- 第2巻 部外秘 『海外放送講演集』 第三号 昭和17年9月
- 第3巻 部外秘 『海外放送講演集』 第四号 昭和17年12月
- 第4巻 秘 『対敵電波戦』 第一号 昭和16年12月～17年11月

◆体裁

A5判・上製クロス装・総1、300頁・ケース入り

◆定価

本体価格64,000円＋税

ISBN4-89774-235-8 C3031 ¥64,000E

◆推薦

内海 愛子〔恵泉女学園大学教員〕
櫻本 富雄〔詩人〕
竹山 昭子〔メディア史研究〕

緑蔭書房

173 東京都板橋区板橋1-13-1 ☎03(3579)5444

特約店